

# 庭園のなかの野生と異文化

—— ウィリアム・ロビンソン『ワイルドガーデン』(1870)の思想と実践について ——

## Cross-cultural and wild gardening: ideas and practice of William Robinson's *Wild Garden* (1870)

橋 セ ツ

キーワード：1. ウィリアム・ロビンソン1838-1935、2. 『ワイルドガーデン』(1870)、  
3. 異文化、4. 野生、5. イングリッシュガーデン

Keywords: 1. William Robinson 1838-1935, 2. *Wild Garden* (1870), 3. cross-culture,  
4. wildness, 5. English garden

### 要 約

イギリスで活躍した園芸家ウィリアム・ロビンソンの『ワイルドガーデン』(1870)は、現代のイングリッシュガーデンのスタイルだけでなく、イギリスのカントリーサイドの風景にも影響を与えた重要な著作であると考えられている。本稿では、ウィリアム・ロビンソンの『ワイルドガーデン』(1870)を野生 wild と異文化 cross-culture という視点から考察する。ロビンソンは、耐寒性のある外来種をイギリスの土壌や環境に馴化させ、イギリスの在来種と共生させる新しい庭園スタイルを提唱した。それは囲まれた土地についての造園だけではなく、イギリスの水辺、メドウ(牧草地・採草地)、森林の下草などの環境に耐寒性を持つ外来植物を導入して、イギリス在来種と混在した植生群落をつくり、野生化させることでイギリスの「自然の」風景を豊かに創りだすような造園方法であった。ロビンソンが実践した「ワイルドガーデン」では、耐寒性のある外来種を野生化させるプロセスを経て、在来種と外来種がともに共生する新たな野生を再創造した。「ワイルドガーデン」によって創られた風景は、外来種(異文化)の野生化に基づくイギリスの風景の再創造であり、ハイブリッドなナショナルリズムだと考えられる。ロビンソンは日本を訪れたことがなかった。しかしながらロビンソンがガーデニングで採用した外来種の植物のなかには、イタドリ(the great Japan knotweed)などの耐寒性のある日本原産植物が含まれていた。また、『ワイルドガーデン』が広く読まれるようになった要因の一つに、アルフレッド・パーソンズが描いた挿絵の魅力があげられている。アルフレッド・パーソンズは、1881年以降の版で挿絵を担当したが、1892年に日本を訪れ、1896年に挿絵付きの旅行記である *Notes on Japan* を刊行している。ロビンソンはパーソンズの挿絵を介しても日本とつながっていた。ロビンソンも19世紀後半から20世紀初めにわたるイギリスにおけるジャポニズムと日本庭園流行の文脈と間接的にはあるが関わっていたといえよう。

## I. はじめに

### 1. 近代イギリスの庭園の展開

近代イギリスの庭園の特色は、(i) 自然風の庭園スタイルの志向、(ii) 異文化の庭園様式と相互に交流してきたこと、(iii) 異国の植物の移入、(iv) 中産階級の勃興にともなって庭園が変化したことの4点が考えられる。

#### (i) 自然風の庭園スタイルの志向

まず、イギリスの庭園の歴史を見渡すと、顕著なのは自然風の庭園を目指してきた歴史を持つことがあげられる。18世紀には、イギリスの貴族や富裕な地主のあいだで、丘や谷のある緩やかな起伏のあるイギリス特有の地形を生かして、地所全体を自然の風景のようにデザインすることが流行した。このような地所では、館を見晴らしの良い場所に配置し、そこから見える風景に気を配り、地所のなかに森やクランプと呼ばれる樹塊を配置し、曲がりくねった道や川の流れや湖などを自然の風景画を描くように、デザインした。このような造園方法は風景式庭園 *landscape garden* と呼ばれ18世紀のイギリスで流行した。このような風景式庭園に基づく地所の改良を推進したのは、ウィリアム・ケント *William Kent*、ランスロット・ブラウン *Lancelot Brown*、ハンフリー・レプトン *Humphry Repton* の3人に代表される風景式造園家 *landscape gardeners* である。風景式庭園の推進者たちは、「自然は直線を嫌う」と主張して、18世紀のフランスのヴェルサイユ宮殿に代表されるような整形式花壇による庭園のもつ直線のラインについてあまりにも人工的で自然から逸脱していると批判した。

#### (ii) 異文化の庭園様式との交流

18世紀のイギリスの風景式庭園という様式は、イギリス発のオリジナルな造園様式が世界に影響を及ぼした例であると庭園史家たちは、論じている。(Hadfield, 1960など) イギリス発の風景式庭園は、ドイツ、オーストリア、フランス、ロシア、スウェーデン、イタリアなどでも「イギリス庭園」として造園されることによって、それぞれの国の整形式庭園に対して、より自然に基づくという考えの造園方法があるということを示した。

逆に、イギリスでも、現在、貴族や富裕な地主の地所であるカントリーハウスの庭園を訪ねると、広大な地所のなかに、国名を冠した庭園がそれぞれふさわしい場所にデザインされ、おさまっている。それらは、イタリア式庭園、オランダ式庭園、フランス式整形庭園、スペイン式庭園、エジプト式庭園、シノワズリー(中国式)庭園、ムガール式庭園、日本庭園などである。これらの、異文化の庭園様式は、初めはエキゾチックなもの新奇なものとしてイギリスの庭園の中でもてはやされた。やがて時間の経過とともに、これらの異文化の庭園スタイルはイギリスの庭園のなかで、それぞれに適した場所や役割を与えられトランスカルチャレーション

のプロセスをたどった。(Hadfield, 1960 ; Elliott, 1986 ; Ottewill, 1989 ; Tachibana et al., 2004)

### (iii) 異国の植物の移入

次に、イギリスの庭園に異国の植物が移入されたプロセスについて紹介する。P. J. Jarvis (1979) によると、イングランドでは、1550年には、外来種で耐寒性がある木本は36品種のみの栽培であったのに対して、1600年までに103品種、1700年までに239品種、1800年までに733品種、1900年までには1911品種にもものぼった。これは、プラント・コレクターの精力的な活動のおかげである。このように、イギリスの庭園では、エキゾチックな植物の流入と耐寒性を備えている植物の自然化・野生化のプロセスが近代に急速にみられた。(Jarvis, 1979)

### (iv) 中産階級の勃興

産業革命後の近代のイギリス社会は、中産階級が勃興した。さらに、上層の労働者階級の中にも庭付きの住居を都市郊外にもつ者もあらわれた。そのような、社会変化にともない庭園スタイルの変化もうながされた。庭園スタイルの大衆化である。これまでのように貴族や富裕な地主層の広大な邸宅の庭園だけではなく、中産階級の郊外住宅でのライフスタイルに合致したこじんまりとした庭園スタイルが模索された。それはなるべくその土地の環境にあった自然な形で庭園を創る試みとなった。同時に「手入れのかからぬ (ローメンテナンス)」「持続可能な庭」を理想とする哲学が誕生した。そのなかで、カントリーハウス専属の庭師が自ら住まうための住居であるコテージ (小屋) cottage で実践したような庭園スタイルであるコテージガーデンが新たに見直された。

## 2. 本稿の視点

本稿では、このようなイギリスの庭園の現代的展開に大きな影響を与えたウィリアム・ロビンソンの園芸書『ワイルドガーデン』(1870) に注目する。そして、野生 wild と異文化 cross-culture は、近代のイギリスの庭園をめぐる重要なキーワードであることを示す。

本稿は、「トランスカルチャレーション」と「生き方」の視点から庭園／風景／環境観のダイナミズムを考察する筆者の一連の研究の継続的發展である。今まで筆者が焦点を当ててきたのは、日本旅行を行い日本庭園との出会いを契機にそれぞれの庭園思想・環境観をイギリスで展開した園芸家であるレジナルド・ファラーやエラ・クリスティーなどであった。(橘, 2006 ; 2008 ; Tachibana, 2000 ; Tachibana et al., 2004) これに対して、今回とりあげるウィリアム・ロビンソンは日本を訪れていない。来日していないイギリスの造園家であるロビンソンが、19世紀後半から20世紀初めにわたる、イギリスにおけるジャポニズムと日本庭園流行の文脈と間接的にはあるが、どのように関わったのかにも注目する。

次のⅡ章では、ウィリアム・ロビンソン1838-1935の人生の軌跡について概観した後に、彼の著作『ワイルドガーデン』(1870)が理想とする庭園について、著作のイラストや記述に基づいて考える。Ⅲ章では、ロビンソンと日本の関係について、ささやかであり間接的なつながりではあるが、イギリスにおけるジャポニズム流行という時代の文化的・空間的文脈に基づいて考察する。最終章のⅣ章では、近代のイギリスの庭園において、ワイルドガーデンの方法でどのように「野生」が新たに創造されたのかについてまとめる。

## Ⅱ. ウィリアム・ロビンソンの『ワイルドガーデン』(1870)

この章では、まず、ロビンソンの「ライフヒストリー／ライフジオグラフィー」(Daniels and Nash, 2004)について概観した後に、ロビンソンの『ワイルドガーデン』(1870)が理想とする庭園について考察する。

### 1. ウィリアム・ロビンソン William Robinson 1838-1935のライフヒストリー／ライフジオグラフィー

庭園史家のメア・アラン Mea Allan は、ウィリアム・ロビンソンの詳細な伝記を執筆している。アランはロビンソンの伝記に「イングリッシュ・フラワー・ガーデンの父」という副題をつけている。(Allan, 1982) 2008年には、庭園史家リチャード・ビスグロブ Richard Bisgrove によって、多くの美しい図版入りの写真集としても楽しめるようなロビンソンの伝記が刊行された。ビスグロブは、このロビンソンの伝記の副題を「ワイルドガーデナー」としている。(Bisgrove, 2008)

これらの伝記研究によって、ロビンソンはどのような人生を送ったのか明らかになっている。これら2冊の伝記に基づき、次に、ロビンソンの人生を簡単に紹介する。

ウィリアム・ロビンソンは、1838年7月15日北アイルランドの County Down で生まれたアイルランド人である。ロビンソンの生まれた地方は、荒々しい花崗岩の丘から肥沃な谷が広がっているのがのぞめるような変化に富んだ豊かな自然の風景が広がっていたという。彼の人生のスタートは、恵まれたものではなく、幼少の頃から日銭を稼ぐために働いたと伝えられている。やがて、ロビンソンは、Waterford 侯爵の地所である Curraghmore で庭師見習いをはじめ、庭師としてのキャリアをスタートさせた。次いで、ダブリンへ出て、National Botanic Garden, Dublin で student gardener として修行した。その後、Ballykilcavan で働くようになったが、温室の室温管理の不備をめぐり口論してそこでの仕事をやめることになったといわれている。その後、ロビンソンは、1861年、23歳の時ロンドンへ修行の場所を移す。ロンドンでは、The Royal Botanic Society's garden in Regent's Park で、本格的な園芸家としてのキャリアをつみ、イギリスの数多くの庭園にかかわる。

ロビンソンが庭園修行をしたヴィクトリア時代中期の園芸では、世界中、特に熱帯地方から

集まった多くのエキゾチックな植物を温室で育てることが流行していた。(Preston, 1999) 1851年のロンドン万国博覧会の会場であったクリスタルパレスを設計したのは造園家のジョセフ・パクストンであった。パクストンはダービーシャーにあるデヴォンシャー公爵の地所である Chatsworth の head gardener として働いていたが、彼がそこで建築した温室が注目をあび、ロンドン万国博覧会のクリスタルパレスの建築をまかされることとなった。パクストンが設計した温室は、当時の最新工業技術の鉄とガラスを駆使した建築であった。(Colquhoun, 2006) また屋外の園芸でも、高価な外来植物をカーペットのように整形式に敷き詰める花壇のスタイルが流行していた。

1866年4月19日にロビンソンはリンネ協会の会員に選ばれ、園芸雑誌 *Gardeners' Chronicle* などに記事の寄稿をはじめ園芸文筆家としてのキャリアをつむ。

ロビンソンは1867年に独立する。彼は、フランスにでかけ、園芸雑誌 *Gardeners' Chronicle* や *Field*、一般紙 *The Times* にパリ博覧会の庭園についての記事を寄稿し、パリで庭園を見学し修行する。とくに1850年代から1860年代にオスマン知事により再編成されたパリの街路などの公共空間の植栽とスタイルを研究する。その成果は2冊の著作、*Gleanings from French Gardens* (1868) と *Parks and Gardens of Paris* (1869) の刊行に結びつく。

1870年にロビンソンは2冊の著作を刊行する。*Alpine Flowers for Gardens* (1870) と *Wild Garden* (1870) の2冊である。著作『ワイルドガーデン』のなかでロビンソンが提唱した考えは、将来手厚い世話をしなくてもいいように完全な耐寒性をもつ外来種をイギリスの野外の土地に植えることである。この提案は、整形式花壇全盛の時代に対してガーデンデザインの革命となった。ロビンソンの勧めた手法は、草地に球根を植える、在来種と外来種を混在させたその土地の環境にあったボーダー（群落）花壇をつくる、柔らかく微妙な色遣いと植物相互の立体的な組み合わせを考慮するといったようなものであった。Bisgrove によれば、ロビンソンは *Wild Garden* を改訂し続け、7版 (1928) まで版を重ねた。ロビンソンの *Wild Garden* は、実用的な園芸指南書としてイギリスで長期にわたってベストセラーになった。

1871年11月から、ロビンソンは、週刊園芸雑誌 *The Garden* の編集者となる。その後、*The Garden* は、1899年にガートルード・ジーキル Gertrude Jekyll に引き継がれた。ジーキルは、庭園において色彩計画の重要性を実践して示し、現代のイングリッシュガーデンの源流をかたちづかった人物のひとりである。ロビンソンとジーキルは生涯にわたって庭園について議論を重ねる友人であった。ジーキルとロビンソンは、ともに、現在のガーデニングの一潮流とされるイングリッシュガーデン像をつくりあげた。

1883年には、ロビンソンは、*The English Flower Garden* を刊行した。

1885年に、ロビンソンは、ロンドンの南西 West Sussex の East Grinstead 近郊にある Gravetye Manor の地所を購入した。Gravetye Manor のエリザベス王朝時代に起源をもつ邸宅と庭園で、ロビンソンは彼の理想とする造園を実践した。1935年に亡くなるまで、ロビンソン



図1 Gravetye Manor (West Sussex) の館を西から望む。庭園は、日時計を中心とした整形式のフォーマルなスタイルと自然風な植栽によるインフォーマルなスタイルが併存している。現在は、Gravetye Manor は、ホテルとレストランになっている。(2009年8月筆者撮影)



図2 Gravetye Manor (West Sussex) の館の西側のポーチから南方を望む。近景の敷地内の庭園は、自然風な植栽によるインフォーマルなスタイル。湖 (The Trout Lake) のある谷をはさんで、中遠景に西サセックス州のカントリーサイド The Weald の風景がひろがっているのが見える。(2009年8月筆者撮影)

は、Gravetye Manor に住み、そこを拠点にワイルドガーデンの考えを中心とした庭園造りと著作の執筆を行い、イギリスにひろくワイルドガーデンの考え方を普及させた。庭園史家のブレント・エリオット Brent Elliott は、ロビンソンの功績は、ワイルドガーデンの考え方の普及 popularizer にあると論じている。(Bisgrove, 2008)

## 2. ウィリアム・ロビンソンの『ワイルドガーデン』(1870) が理想とする庭園

ロビンソンの著作『ワイルドガーデン』の初版に記されている正式タイトルは少々長い。『ワイルドガーデン、または、わたしたちの木立や植え込みを耐寒性のあるエキゾチックな植物を自然化することによって美しくすること、イギリスの野生花による庭園についての章を添えて』*The Wild Garden or our groves & shrubberies made beautiful by the naturalization of hardy exotic plants: with a chapter on the Garden of British Wild Flowers.* (1870)

この長いタイトルの中に、ロビンソンが考えるワイルドガーデンとは何であるかが凝縮されている。次に、この『ワイルドガーデン』(1870) が理想とする庭園について考えるために、まず、初版の唯一のイラストであるタイトル頁の隣の頁に掲げられたイラストを読み解く。次に、ロビンソンの主張と著作『ワイルドガーデン』のインパクトについて考える。

### (i) ワイルドガーデンでロビンソンがどのような庭園を目指していたのか、初版のイラストから読み解く

『ワイルドガーデン』(1870) 初版における唯一のこのイラストは、自然の理想的な姿をフレームに入れて切り取ったかのような庭園が描かれている。イラストの下には、イギリスの哲

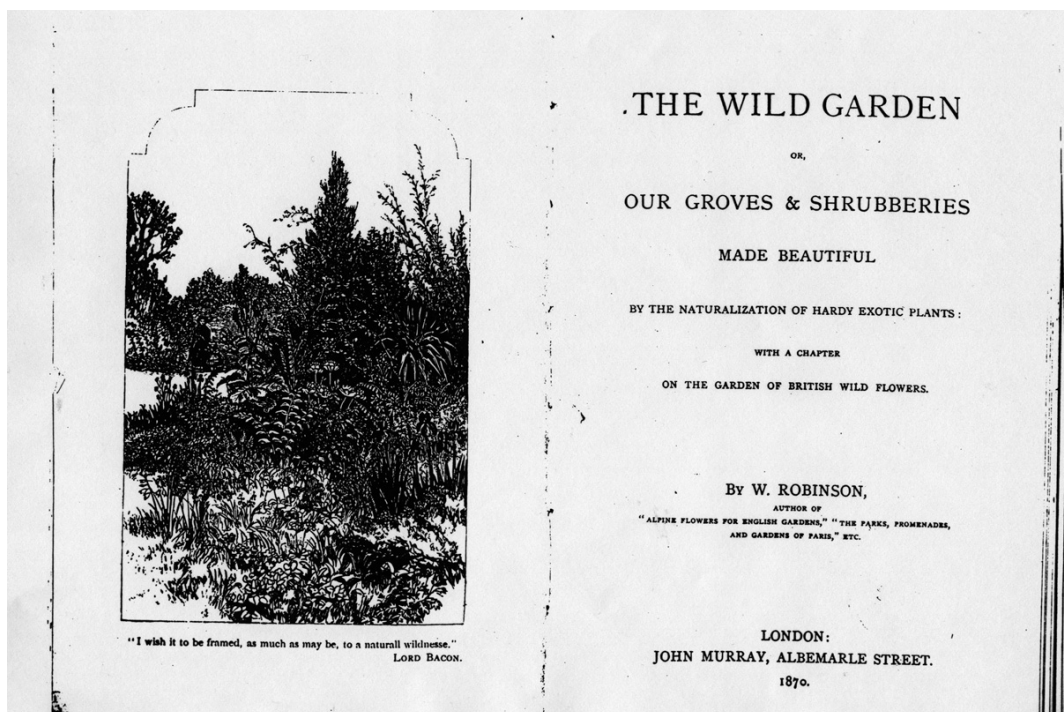


図3 William Robinson の *Wild Garden* (1870) 初版にある巻頭のイラストとタイトル頁

学者 Lord Bacon (Francis Bacon) による “I wish it to be framed, as much as may be, to a naturall wildnesse” のことばが引用されている。Helmreich によれば、Francis Bacon が1625年に “Of Gardens” で理想の庭園は荒野 heath である自然の野生 natural wildness を切り取って額縁に入れたものも含めなければならないと論じている。(Helmreich, 1997)

このイラストには、立体的な植栽、つまり、高木から下草までバラエティに富む、樹木、灌木、花、宿根草などの葉や花の色や質感の変化に富む自然風な植栽が描かれている。当時、ヴィクトリア時代の流行である温室に植えるような植物や整形形式花壇のような植栽とは異なったスタイルである。

描かれている植生は、常緑樹が圧倒している。シャクヤク peonies、ユッカ yuccas、アイリス irises などの外来種もイギリスの在来種と共生させて野生化されている状態がイラストには描かれている。

このイラストからワイルドガーデンでは、毎年人工的に種を植えるのではなく、宿根草を野生化させるスタイルの庭園で、必要以上に人の手をかけない庭園が目指されていることが理解できる。

イラストの中には、小道に身なりのよい女性と子どもが向こうから歩いてくるのが描かれている。この女性と子どもは庭園の所有者ではなく、小道を歩く通行者として描かれている。通

行者がこの場所にアクセスできるということは、ワイルドガーデンは、オープンフィールドを意識した植栽だと考えられる。オープンフィールドとは、塀に囲まれた閉鎖空間ではなく、公共性のある場所である。

Helmreich は、ワイルドガーデンの中に身なりのよい女性と子どもが描かれているということは、ロビンソンがワイルドガーデンを規則のない規制されていない危険な場所としての野生を考えていたのではなく、むしろ女性や子どものためのレジャーにふさわしいような守られた安全な場所だと考えていたと論じている。このことから身なりのよい中産階級の女性のライフスタイルに合致し、彼らの消費の対象となるような場所としてのワイルドガーデンが想起される。(Helmreich, 1997)

## (ii) ウィリアム・ロビンソンの主張とインパクト

まず、ロビンソンは、当時の流行であった温室の中に保護された熱帯植物志向に反対するガーデニングのスタイルを提唱した。ヴィクトリア時代に流行した外国種・一年草を使った派手な装飾模様の花壇や立体花壇にも強固に反対した。ロビンソンは、ヴィクトリア時代に流行した温室と整形式花壇は、経済的費用も莫大にかかり、手間もかかる人工的で不自然な庭園の手法だと論じ攻撃した。

一方、ロビンソンの提唱するワイルドガーデンとは、イギリス在来種に加え、ヨーロッパやアジアの耐寒種を新たに導入し、イギリスの屋外の土壌や環境に馴化させる手法をとる。ロビンソンは、エキゾチックな植物の野生化・自然化について熱心に論じた。彼はイギリスの土壌と気候に合った自然な越冬植物(樹木、灌木、花、宿根草)を使い自然なガーデニングを提案した。彼は、世界中から近代イギリスに集まってきた耐寒性のある野生に育つ植物を、イギリスの土地に根付くかどうかひとつひとつ試しながら試行錯誤した。彼の著作『ワイルドガーデン』には、それぞれの土地の環境、たとえば水辺、メドウ(牧草地・採草地)、日陰、森林の下草などごとに植栽するのにふさわしい膨大な植物のリストが植栽方法とともに記載されている。

ロビンソンが目指したのは、春になると水仙やクロッカスなどが森林の木立の下に群生して広がるような「自然な風景」をつくりだすような庭園であった。彼が目指したのは、イギリスの土地の環境に適合した耐寒性を持つ外来植物を導入して、イギリス在来種と混在した植生群落をつくり、野生化させることでイギリスの自然の風景自体を豊かにする試みであった。塀で囲まれた中での造園だけではなく、イギリスの自然の拡がりのある風景を豊かに創りだすような造園方法である。彼が推し進めたのは注意深い園芸家の環境知識と手によって新たな自然を創る試みであった。

ロビンソンが試みたのは、異文化の種を野生化することによって在来種と共生し、イギリスの豊かな風景を創造するような、ハイブリッドなナショナリズムを目指したのだと解釈できる。



さらに、ロビンソンの試みは18世紀の風景思想家が好んで論じた風景の「改良」(improvement)の思想の19世紀後半的な継承だとも考えられる。

ロビンソンは、ワイルドガーデンの考え方を敷衍すると、森、湿地、メドウ(牧草地・採草地)などもデザインして自然の風景の庭園にできることを示した。ワイルドガーデンの方法論は、イギリスの現代庭園の源流のひとつとなっている。また、ロビンソンのワイルドガーデンは、経済的な造園でもあるので、広大な庭園の敷地を持つことのない中産階級や労働者階級の庭造りでも応用できるような持続可能な庭園であった。20世紀のガーデニングを見渡すと、ロビンソン流のワイルドガーデンの庭園が、現代のいわゆるイングリッシュガーデンの主流になっていく。

現在のイギリスでは、どのような街の舗道の脇の植え込みの灌木などの下にも、春になると、ダフォデルとよばれる水仙の群落が顔を出す。イギリスのオープンスペースを歩く楽しみは、1月はスノードロップ、2月はクロッカス、3月にはダフォデル(水仙)、春が深まる5月から6月にかけてはブルーベルというようにそれぞれの時期に応じて木立の下に宿根草の見事な群生が見られることである。現在、当たり前となっているようなこのようなイギリスの自然の風景はロビンソンのワイルドガーデンの考え方が普及した結果であると考えられる。現在のイギリスでは、だれもあえてロビンソンのワイルドガーデンと言わなくても、ロビンソン流のワイルドガーデンに囲まれて生活している。

### Ⅲ. ウィリアム・ロビンソンと日本

この章では、ロビンソンと日本について考察する。ロビンソン自身は、日本旅行を経験していない。しかし、ロビンソンが生きた時代のイギリスの園芸や庭園は、日本との交流が大きかった。

#### 1. 日本旅行体験者からの刺激

ロビンソンの活躍した時代は、世界に向けて開国した日本から日本原産の植物が多くイギリスに流入した時代でもあった。ロビンソンが、ダブリンからロンドンに移って、本格的な園芸修行をはじめた1861年は、イギリス人のプラントコレクターによって日本で集められた耐寒性をもつ装飾植物や有用植物がはじめて売り出された年である。

プラントコレクターのジョン・ゲールド・ヴィーチとロバート・フォーチュンが日本で商業的植物を採集・買い付けたのは、1860年で、その植物がイギリスに運ばれて、はじめて商業ベースにのり売り出されたのが1861年である。後にロビンソンも多く園芸記事を執筆することになる園芸雑誌の *Gardeners' Chronicle* に、ヴィーチ商会は、*New Hardy Japanese Conifers* の見出しで広告を、1861年6月1・8・15日に掲載した。また、フォーチュンが日本で集めた植物は、ジョン・スタンディッシュ商会によって売り出されたが、かれらは同雑誌に、*Hardy Japanese*

Plants という見出しで広告を1861年10月5日、11月2日、12月7日に掲載した。それ以外にも、1861年には、ヴィーチとフォーチュンによる日本レポートが数多く掲載されている。(Tachibana, 2000; 白幡, 1994)

1861年にロンドンに出てきて、園芸の世界で身を立てようとした当時23歳のロビンソンは、*Gardeners' Chronicle*などの園芸専門雑誌を読み、そこに満載されていた日本についての記事を目にしていたに違いない。

1860年代のイギリスでは日本からの新しい植物の流入と、当時はまだ少ない日本旅行経験者による旅行記などに記載された日本の園芸や庭園などの情報に関心が集まった時代であった。やがて、日本からの植物をイギリスの庭園に植えるだけでなく、日本庭園をつくることがイギリスで流行した。(Tachibana, 2000; Tachibana et al. 2004; 橘, 2006, 2008)

このような時代のイギリスに生きたロビンソンの周りの園芸家や芸術家にも、日本旅行や日本の植物や庭園から大きな影響を受けながら活動を行った人びとがいた。ロビンソンも彼らから間接的な影響をうけているのではないかと考えられる。

植物画家アルフレッド・パーソンズ Alfred Parsons 1847-1920は、ロビンソンの『ワイルドガーデン』の1881年以降の版に100枚近くの挿絵を描いた。パーソンズは、イギリス南西部にあるサマーセット Somerset の園芸好きな外科医の息子として生まれた。彼は、はじめは郵便局で働きはじめるが、やがてケンジントンの画学校で学び、水彩画家となる。後に、ガーデンデザイナーとしても活躍した。(Millette, 1995) Bisgrove によると、パーソンズは、1875年(もしくは、1878年)2月にロビンソンに手紙を書き、ロビンソンのワイルドガーデンの考えに共鳴し表現した絵画をたくさん描いているから、ロンドンの Marylebone にある彼のスタジオに絵を見に来て欲しいと売り込み、成功した。パーソンズは『ワイルドガーデン』の挿絵を1881年以降の版に描いた。パーソンズの見事な挿絵のおかげで『ワイルドガーデン』は、より魅力的な本となったと評価されている。(Bisgrove, 2008: p.79)

この挿絵(図4)は、パーソンズが描いた『ワイルドガーデン』の第4版(Scolar Pressによる復刻版)の巻頭に掲載されたイラストである。挿絵には‘Combe in west country with primroses, kingcups and daffodils’ とキャプションがある。Combe は、パーソンズの故郷の Somerset にある。挿絵には、イギリスの春先のカントリーサイドの風景が描かれている。そこには、小川が流れ、若葉が芽吹く前の広葉落葉樹の林床に宿根草である、イギリスの春を告げる典型的な植物、黄色い桜草であるプリムローズ、キングスカップ、水仙であるダフォデルが群生している。

パーソンズは、このイラストを描いた後の時代である1892年に、日本旅行を行った。彼は、長崎から瀬戸内海、関西、富士山などを9ヶ月かけてめぐった。帰国後、パーソンズは、1896年に水彩画の挿絵のある *Notes in Japan* を刊行している。(菅野, 1997; 谷田, 2006; 金子, 2007)

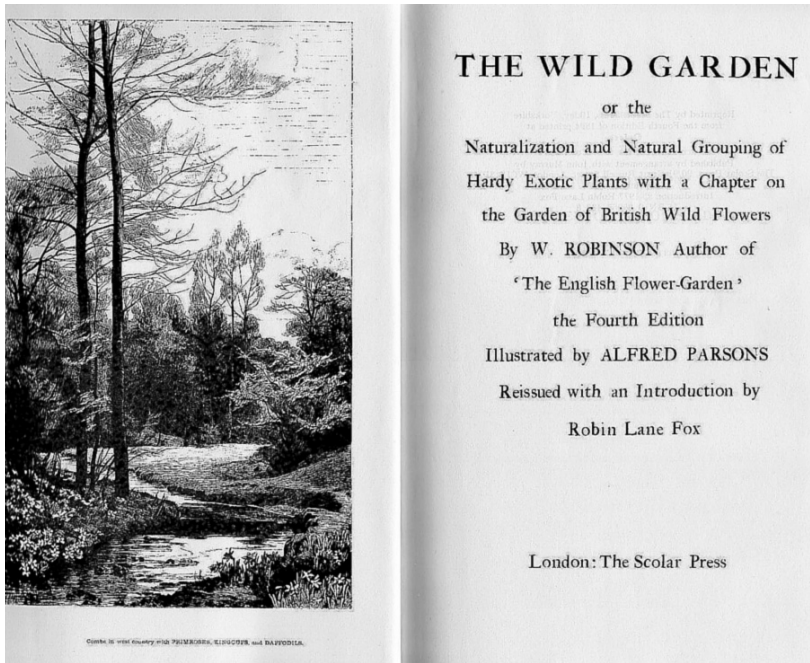


図4 William Robinson の *Wild Garden* の4版の復刻版 (Scolar Press による) : Alfred Parsons による巻頭のイラストとタイトル頁

西田正憲は、パーソンズの水彩画に描き込まれている「原生景へのまなざしともよぶべき自然観」について考察している。(西田, 2003 : p.393) 西田の指摘しているようなパーソンズのもつ「原生景へのまなざし」とは何であったかについて、彼の人生全体を射程に入れて考察するならば、パーソンズがロビンソンの『ワイルドガーデン』の挿絵を数多く描き、ガーデンデザインをするなかで鍛えられた自然観でありまなざしであったのではないかと考えられる。

パーソンズは、植物を得意とする画家であり、彼は、後に、日本を訪れた外交官である A. B. フリーマン-ミットフォード (リーズデール卿) による竹についての著作 *The Bamboo Garden* (1896) の挿絵も描いている。

## 2. ワイルドガーデンの日本の植物

耐寒性のある日本原産植物が多くロビンソンのワイルドガーデンに導入された。1894年の4版の『ワイルドガーデン』には、多くの日本原産植物が言及されている。

White Japanese Anemone (パーソンズの挿絵 p.32);

the Japan Windflower (p.151);

the Japanese Rose (p.64, p.120);

the dwarf Japan Crabs and Apples;

the Quince, the Japan Pear (p.65);

Japanese and other Honeysuckles (p.86);

Iris Kaempferi (p.88; the Japanese iris p.176);

the great Japan knotweed (*Polygonum cuspidatum*, パーソンの挿絵 p.184)  
である。

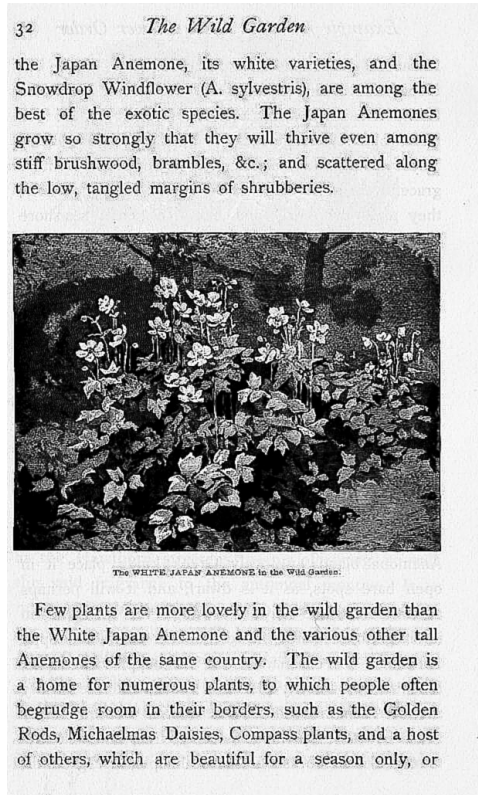


図5 William Robinsonの *Wild Garden* の4版の復刻版 (Scolar Pressによる; p.32) にある Alfred Parsonsによる *The White Japanese Anemone* の挿絵。ロビンソンは、文章でも、「ワイルドガーデンに咲く、白色の日本アネモネや他のいろいろな日本原産の背の高いアネモネよりすてきな (lovely) ものはめったにない。」とコメントしている。

パーソンズが描いた次の挿絵 (図6) は、*The great Japan knotweed* (*Polygonum cuspidatum*) とタイトルがついている。*The great Japan knotweed* (*Polygonum cuspidatum*) は、イタドリ (タデ科) であり、非常に繁殖力が強い多年草である。ロビンソンは、『ワイルドガーデン』の中で「庭園の中では他の植物を圧倒する繁殖力をもつ恐れがあるので、遊園地の外縁や十分に土のある水辺に植栽すると見栄え handsome がする」(p.184) と述べる。また、その植栽についてロビンソンは「秋に咲く花は最も効果的」(p.184) とコメントした。

ロビンソンも理解していたように、この *Japan knotweed* と俗称されるイタドリの繁殖力は

強大であった。ロビンソンの時代から100年以上たった現在、イギリスでは、このイタドリは、河川敷などのオープンフィールドや鉄道線路の脇などいたるところではびこり「侵略的な外来種」として位置づけられている。たとえば、2009年8月16日の朝日新聞の一面の「地球異変・脅威日本生まれ」の記事でも「日本原産の動植物が海外に渡って繁殖し、生態系を破壊するなど迷惑をかけている。」と、イタドリの例が報道されている。記事によると「英国は、除草剤をまくなどイタドリ対策のために年間2500億円ものコストがかかると見積もる。英政府は現在、昆虫を使う新しい防除策を検討中だ。」(朝日新聞2009年8月16日(14版)2面)



図6 William Robinsonの*Wild Garden*の4版の復刻版(Scolar Pressによる;p.184)にあるAlfred ParsonsによるThe great Japan knotweed (*Polygonum cuspidatum*)の挿絵。

#### IV. おわりに：近代イギリス庭園にみられる「野生」の再創造

最後に、19世紀後半における野生についての文化的意味とロビンソンにおけるガーデニングと「野生=自然」について考察してまとめとする。

##### 1. 野生(ワイルド wild、ウィルダネス wildness)の文化的意味

ロビンソンの活躍した19世紀後半は、「ほんものの野生」いいかえると「原生自然ともいべきもの」は、地上から姿を消しつつある時期と重なっている。アメリカ西部開拓の歴史をみても、東海岸から出発した開拓者が西海岸に到達したために、もう開拓すべきフロンティアがなくなってしまったのも19世紀の終わりである。人間の文明化の歴史は、人間が自然を開拓、開墾することによって、自然を人間の側に手なずけてきた歴史である。しかし同時に、野生を人間の手で創りだしていかなくてはならない、守らなくてはならないという考え方も生まれた。そこには人工と自然あるいは野生という絶妙のバランスが求められた。

野生は、人間の手でコントロールされ、創りだされる風景でもあった。イギリスの庭園の歴史をみると、貴族や富裕な地主の邸宅の地所のなかでは、敷地の一角にウィルダネスと呼ばれる場所を確保して「原生自然ともいべき」自然に還る場所をつくっていた。

##### 2. ウィリアム・ロビンソンにおけるガーデニングと「野生=自然」

ロビンソンはガーデニングを「芸術の最高の形態」highest form of art だと考えていた。ガー

デニングは、自然を直接扱って表現する芸術である。(Bisgrove, 2008) それは、手をかけること(手をかけすぎないことが重要)と自然にまかせることの絶妙なバランスの上に成り立つ芸術であった。

最後に庭園の中でどのように「野生」が創造されてきたのか、ロビンソンの方法をまとめる。ロビンソンの考えるワイルドガーデンとは、耐寒性のある(=イギリスの環境に適応した)外来種(異文化)を巧みに取り入れて在来種とともに混植して群生させる方法をとった。ロビンソンは、豊かな野生を創り出すために、異文化の力を利用すること(外来植物のトランスカルチャーション)をあみだした。ワイルドガーデンでは、外来種を野生化させるプロセスで、在来種と外来種がともに共生する新たな野生を再創造した。ロビンソンの試みは、外来種(異文化)の野生化に基づくイギリスの風景の再創造の方法であり、ハイブリッドなナショナルリズムを目指した。さらに、ロビンソンは18世紀の風景思想家が好んで論じた風景の「改良」(improvement)の思想の19世紀後半における継承を行ったと考えられる。

## 参考文献

- 赤川裕 (1997) 『英国ガーデン物語』 研究社
- 安西信一 (2000) 『イギリス風景式庭園の美学：〈開かれた庭〉のパラドックス』 東京大学出版会
- 岩切正介 (2004) 『英国の庭園：その歴史と様式を訪ねて』 法政大学出版局
- 金子孝吉 (2007) 「アルフレッド・パーソンズと彦根天寧寺 (1)」 (p.137-153) 『彦根論叢』 367号
- 金子孝吉 (2007) 「アルフレッド・パーソンズと彦根天寧寺 (2)」 (p.65-80) 『彦根論叢』 368号
- 川崎寿彦 (1997) 『庭のイングランド』 名古屋大学出版会
- 菅野洋人 (1997) 「来日した3人のイギリス水彩画家たち」 (p.339-343) 渡辺俊夫監修『自然の美・生活の美：ジョン・ラスキンと近代日本展』 ラスキングャラリー、シェフィールド
- 白幡洋三郎 (1994) 『プラント・ハンター』 講談社
- ガートルード・ジーキル、リチャード・ビスグローブ (土屋昌子訳) (2008) 『ジーキルの美しい庭：花の庭の色彩設計』 平凡社
- 鈴木誠編 (2006) 『海外の日本庭園』 日本造園学会
- 橘セツ (2006) 「庭園をめぐるライフヒストリー／ライフジオグラフィー：英国人植物学者レジナルド・ファラーの日本旅行とロックガーデンに魅せられた人生」 (p.89-104) 『神戸山手大学紀要』 8号
- 橘セツ (2008) 「世界漫遊旅行者と庭園：エラ・クリスティの日本旅行とコウデン城の日本庭園造園」 (p.31-49) 『神戸山手大学紀要』 10号
- 谷田博幸 (2006) 「交差する両洋の眼差し：アルフレッド・パーソンズと明治の水彩画」 川本皓嗣・松村昌家編『ヴィクトリア朝時代英国と東アジア』 思文閣出版
- 中山理 (2003) 『イギリス庭園の文化史』 大修館書店
- 西田正憲 (2003) 「明治後期の風景画家アルフレッド・パーソンズと大下藤次郎による自然景の発見」 『平成15年度日本造園学会全国大会研究発表論文集21：ランドスケープ研究』 66(5) (p.393-396) 日本造園学会
- 能勢健吉 (1998) 『庭と地域に自然を呼ぶカントリーガーデン入門』 農文協
- 宮前保子 (2001) 『“イングリッシュガーデン”の源流：ミス・ジーキルの花の庭』 学芸出版社
- ケイ山田 (2002) 『庭はもう一つの部屋：ケイ山田のイングリッシュガーデン』 NHK 出版

「地球異変・脅威・日本生まれ」朝日新聞2009年8月16日（14版）1・2面

- Alfrey, N., Daniels, S. and Postle, M. Eds. (2004) *Art of the Garden: the Garden in British Art, 1800 to the Present Day*. Tate.
- Allan, Mea (1982) *William Robinson 1838-1935: Father of the English Flower Garden*. Faber and Faber.
- Bean, W. J. (1914) *Trees and shrubs hardy in the British Isles*. Vols. I-III. (1st edition.) John Murray.
- Bisgrove, Richard (2008) *William Robinson: the Wild Gardener*. Frances Lincoln Limited Publishers.
- Colquhoun, Kate (2006) *The Busiest Man in England: A Life of Joseph Paxton, Gardener, Architect & Victorian Visionary*. David Godine.
- Conway, Judith (1988) *Japanese Influences on English Gardens*. Unpublished thesis submitted for Architectural Association, Conservation of Gardens Course.
- Daniels, S. and Nash, C. (2004) 'Lifepaths: geography and biography' *Journal of Historical Geography*. 30-3. 449-458.
- Elliott, Brent (1986) *Victorian Gardens*. A Batsford Book.
- Elliott, P.; Watkins, C. and Daniels, S. (2007) "Combining science with recreation and pleasure": cultural geographies of nineteenth-century arboretums.' *Garden History: Journal of the Garden History Society*. 35-Suppl.2. 6-27.
- Elwes, Henry John and Henry, Augustine (1907) *The Trees of Great Britain and Ireland. II*. Privately Printed. (Edinburgh).
- Farrer, Reginald (1907) *My Rock Garden*. Edward Arnold. London
- Hadfield, Miles. (1960) *A History of British Gardening*. John Murray. London.
- Helmreich, Anne. L. (1997) 'Re-presenting Nature: ideology, arts, and science in William Robinson's "Wild Garden"' in Wolschke-Bulmahn, Joachim. Eds. (1997) *Nature and Ideology: Natural Garden Design in the Twentieth Century*. *Dumbarton Oaks Colloquium on the History of Landscape Architecture*, XVIII.
- Jarvis, P. J. (1979) 'Plant introductions to England and their role in horticultural and silvicultural innovation, 1500-1900' in H.S.A. Fox and R.A. Butlin (eds) *Change in the Countryside: Essays on Rural England 1500-1900* Institute of British Geographers Special Publication, No 10, 145-164, 153.
- Milette, Nicole. (1995) *Parsons, Partridge, Tudway: An Unsuspected Garden Design Partnership 1884-1914*. PhD thesis submitted to the University of York (Institute of Advanced Architectural Studies)
- Ottewill, David (1989) *The Edwardian Garden*. Yale University Press.
- Potter, Jenniffer (2000) *Lost Gardens*, Channel 4 Books, London, 55-75.
- Pratt, Mary Louise (1992) *Imperial Eyes : Travel Writing and Transculturation*. Routledge. London.
- Preston, Rebecca. (1999) "The scenery of the torrid zone": imagined travels and the culture of exotics in nineteenth-century British gardens' in Driver, F. and Gilbert, D. Eds. (1999) *Imperial Cities*. Manchester University Press.
- Redesdale, Lord. (Mitford-Freeman, A. B.) (1896) *The Bamboo Garden*. Macmillan.
- Robinson, William. (1870) *Wild Garden*. John Murray.
- Robinson, William. (1870) *Alpine flowers for English Gardens*. John Murray.
- Robinson, William. (1894) *Wild Garden* (4<sup>th</sup> edition) Illustrated by Alfred Parsons.
- Robinson, William. Introduction by Robin Fox (1977) *Wild Garden* (reprint of 1894 (4<sup>th</sup> edition) The Scholar Press
- Robinson, William; Wild Garden の項、Geoffrey and Susan Jellicoe et al. (1986) *The Oxford Companion to Gardens*. Oxford University Press.

Tachibana, Setsu; Daniels, Stephen, and Watkins, Charles (2004) 'Japanese gardens in Edwardian Britain: landscape and transculturation' *Journal of Historical Geography* 30-2, 364-394.

Tachibana, Setsu (2000) *Travel, plants and cross-cultural landscapes: British representation of Japan, 1860-1914*. PhD thesis submitted to the University of Nottingham.